

竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』

(人文書院、2005年、548ページ、3,800円)

本書は、人種概念を歴史化し、ヒトの多様性を理解することを通じて、さまざまな形で歴史上現われ、また現在も続いている人種差別についてより根本的な考察を可能にすることを目指している。人種とは人類史上普遍的に存在した現象なのか、それとも近代西洋の産物なのかという論争を止揚するため、本書は近代以前や西洋以外での人種概念を分析する一方で、現在の人種概念が「マイノリティにとって人種差別に抗する闘争やアイデンティティ・ポリティクスのための発話と実践の位置を提供している」ことを積極的に評価している。そして、ヒトゲノムの解読により、一時は否定されていた人種間の科学的な差という概念が再評価される危険性にまで言及する。

第I部「人種概念の包括的理解に向けて」は編者竹沢泰子による総論である。竹沢は人種概念を構築する諸現象の最大公約数を抽出し、race, Race, RR (Race as Resistance) という三つの位相を提示する。race とは「社会分化した集団の差異」が世代を超えて継承され、その差異が「優劣や排除をともなって政治・経済・社会制度に表現される」現象を、Race とは世界の人々のマッピングと分類を意識して構築された科学的概念として流通する人種を、RR とは社会で劣位の人種とされた集団がマイノリティ運動や連帯を通じて新たに積極的な意義付けを与える「抵抗としての人種」意識を、それぞれに指している。その上で筆者は、「自己」と「他者」の境界線を固定化させることなく、ヒトの分類の根拠となる共通性・類似性を多元的に模索し、むしろ表象化された「他者」とは人間個々人が内側に秘める断片の化身に過ぎないことを理解することが、人種差別と闘う鍵となると主張する。

第II部「白色人種」「黒色人種」「黄色人種」は、ヨーロッパ、北米、中国の三地域の人種概念の歴史的形成過程をそれぞれ分析する三つの論文で、上記三種の「人種」が構築されたプロセスを明らかにしている。「一九世紀ヨーロッパにおける人種と不平等」と題されたロバート・ムーア論文は、普遍的な人間本性を標榜する啓蒙主義、近代の社会変化に対抗し社会の自然法則を見つけようとしたロマン主義のどちらもが、近代化で台頭した資本家や中産階級の政治的経済的利害に都合のよい人種概念の創造と固定化を防ぐことができず、むしろそれを促進したことを批判する。オードリー・スメリー論文「北米における人種イデオロギー」は、奴隷を経済的身分から人種区分に基づく形に変えたアメリカの奴隷制度に、「白人」を頂点に有色人種を肌の色で

階層化する人種イデオロギーの起源を見出している。坂元ひろ子による「中国史上の人種概念をめぐる」は、中国における人種概念の形成を中華思想の直接の産物ではなく、ヨーロッパ列強による植民地化の脅威に対して中国がナショナリズムを強化していく過程で、ヨーロッパの人種概念を輸入するとともにそれに独自の序列化を加えていったと説明する。近代化を目指した中国人が優生学や社会進化論を転用しつつ、漢族の（特にアジアの少数民族に対する）優越性を主張していった点、また女性が「国民の母」として再認知されるジェンダー言説を生じた点などは、日本の体験とも比較でき興味深い。

第III部「近代日本における人種と人種主義」は、日本の近代化と国民国家形成過程において、人種概念が西洋科学の名のもとに果たした重要な役割を分析している。まず「人種・民族・日本人—戦前日本の人類学と人種概念」と題された坂野徹論文は、日本における人類学・民族学が日本人というものを解釈するために、人種=生物学的/民族=文化的なヒトの区分という区別を都合よく組み合わせる過程を近代国民国家形成とその後の帝国主義的拡大の文脈から説明している。富山一郎による「『南東人』とは誰のことか」は、植民地被支配者として沖縄人が自らを名乗る際の苦悩を、フランツ・ファノンの精神分析論と重ね合わせつつあぶり出す。苛酷な植民地支配のもとで心的外傷を負った琉球人が「個性」を名乗ることは極めて困難であったが、逆に、いやそれゆえに狂気のなかで自分をあえて語ることのなかに富山は権力に抗う運動の始まりの位置を見る。黒川みどりによる「人種主義と部落差別」および高木博志による「近代天皇制と賤・穢」は、日本の近代ナショナリズムと被差別部落の「人種化」との関係性を明らかにする。黒川論文は天皇の神格化と、被差別民が「異種」として人種化され、貧困・犯罪・病気の温床といった社会悪のイメージを押し付けられていく過程を近代国民国家形成の一環と位置づける。高木論文は、明治時代以降、天皇家の御陵が聖地化されていく過程で周辺にある被差別部落が強制移動させられた例を奈良や京都の地図を使って説明する。部落差別が人種主義的言説を帯びていくのが近代であるという視点は、本書で挙げられている他地域の事例と共通性を持っている。

次の第IV部「植民地主義とその残影」で分析されているインドとアフリカの人種観の形成過程にも同様のパターンが見られる。「インドにおけるカースト・人種・植民地主義—社会通念と西洋科学の相互作用」のなかでサブハードラ・チャンナは、古代よりインド社会を分断してきたジャーティが肌の色や生物学的区分ではなく、宗教的浄性に基づく職能区分であり、その境界も流動的なものであったと主張する。これを肌の色による科学的分類へと読み替え、アリア人征服説に結びつけたのはイギリス人植民地支配者であった。しかしチャンナは同時に、この説がインドのエリート層が